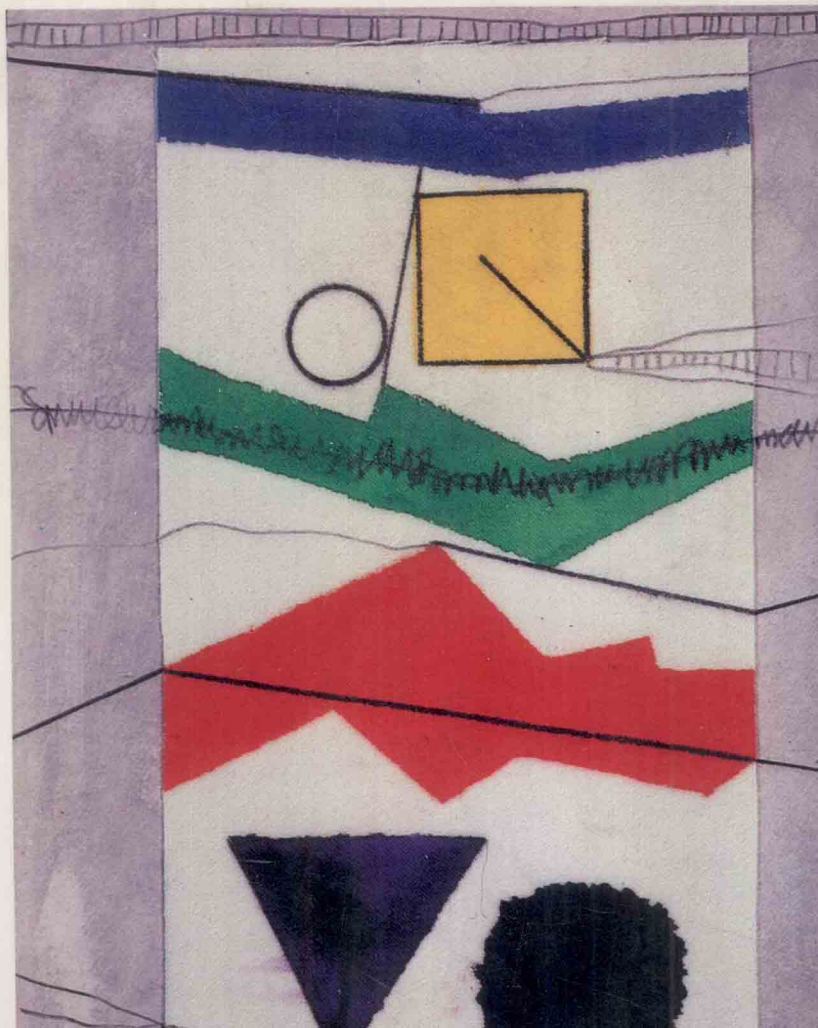


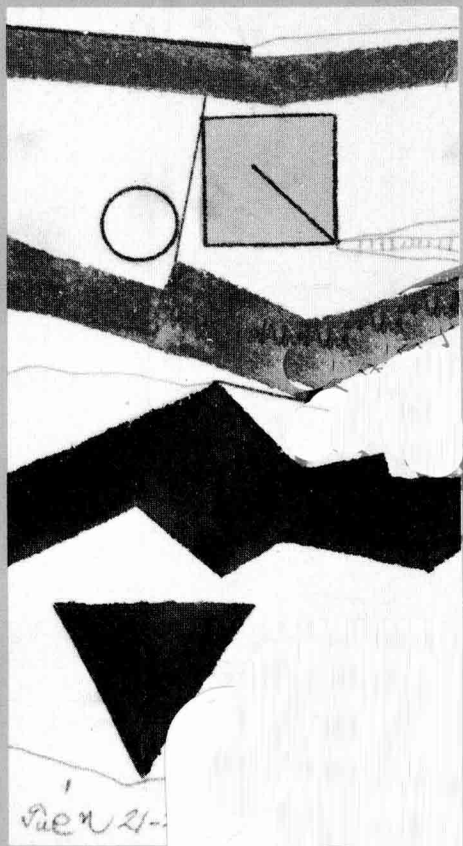
こころ (上)

瀬戸内晴美



こころ(上)

瀬戸内晴美



講談社

こころ 上

一九八〇年二月二〇日第一刷発行
一九八〇年三月二八日第二刷発行

著者——瀬戸内晴美^{せと うちなるみ}

© Setouchi Harumi 1980. Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三三三 郵便番号三三 電話東京三—四四—二三 振替東京—三三〇〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——九五〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

こころ

上

目次

初雪							秋風
149							7
	ともしび	陽だまり	木の実	冬銀河	枯むぐら	ざくろ	こおろぎ
	131	113	95	77	59	41	24

白衣	旅路	春の雪	風の宮殿	舟唄	同行	微笑	冬菫
301	281	261	248	223	201	186	170

装 装
幀 画
・ 猪
山 熊
岸 弦
義 一
明 郎

こころ
上

秋風

プラットホームにも、さわやかな秋風が吹きぬけていた。

新幹線ひかりが、巨大な蚕のように、頭からホームにすべりこんでくる。文子是新幹線を見る度、化物じみた蚕を連想して気味が悪い。

9号車の窓外に近づいて中を覗くと、網棚にのび上って、スリッケースをおろす啓子の姿が目の前にあった。

指で硝子を叩いてみたが、啓子は気づかず、両手いっぱい荷物をさげ、人々の列にはさまって入口に向っている。

ベージュのニットスーツを着た啓子を、また一まわり肥ったなと文子は思った。

純二をふりかえると、いつのまにか売店へ行つてミルクをらっぱのみしている。

「純！ 純！」

文子は純二にふりむかせておいて、入口に駆けよっていった。

「まあ、すみません」

啓子は持ち前のゆったりした口調で、もうすっかり故郷の関西なまりになっていた。

「疲れたでしょう、大丈夫かしらすぐ行つて」

「平気、平気」

「純、早くお持ちしなさい」

文子にいわれて純二がべこっとお辞儀をしながら、長い腕をのばして啓子の荷物を奪うようにとりあげた。

「まあ、純ちゃん？ この人が？」

啓子はそこに一番若い時のおもかげをとどめている大きなまろい目をいっばいに見開いて、高い声をあげた。

「いらっしやい、純二です」

改めて純二がまた頭をさげた。

「ほんまに大きいなって……こんなだったわよ」

啓子は片手を自分の腰のあたりに横にして横にしてみた。

「まさかあ」

純二が白い歯を見せて笑った。

「万博の時だもの、ぼく小学校の五年生でしたよ」

「そうやねえ、もう十年近くも逢ってないんだもの、大きいなる筈ね、わたしのことよう覚えてる？」

「ええ、どっかの小ちゃな国の出してたテントの中でキューイごちそうしてもらいました」

「キューイ？」

「ほら、卵みたいな形のみどりいろの果肉のくだものよ」

横から文子がいう。

「あれ以来この子の好物になってしまったの」

「ああ、あれね、へんなこと覚えてるのね。もっと御馳走しなかったかしらん」

「時間がないから、じゃ純、荷物頼んだわよ」

文子が話を打ちきらした。背の高い純二が軽々と荷物を下げて立ち去る後から、二人の旧友も足をせかせ、プラットホームの階段を下りていった。

中央線の中は結構こんでいた。ふたりは吊革にぶら下りながら、ふたりだけに聞える声で頬をよせるようにして話しつづけていた。

子供をつれて万博に行き、啓子の里の京都の岡崎の家で落合った後も、ふたりは四、五年前、一度逢っている。

都心のホテルの宮城のお堀を見下す部屋で、声を噛み殺すようにして、嗚咽した啓子の姿が、文子の臉の裏にはまだありありと焼きついてた。死んでしまった方が楽だといって、身悶えしたあの時の啓子の苦悩はどこへいったのだろう。「忘るることのなんぞ早き」、誰かの歌の一節が電車の車輪のひびぎに乗って走り去っていく。

中央線の電車を待つ間、プラットホームで、

「産んでおいてよかったわねえ」

と啓子らしみじみいったことを、文子は反芻しながら、純二がおなかにいた時受けたあのショックさえ、歲月という葉が忘れさせかけていることを考えていた。

「今ならおろせるわ。あと一ヵ月もしたら無理なの、とても、今の気持で、この子を産む気にはなれないのよ」

泣きじゃくる文子を、まだ妊娠の経験のなかった啓子は、なだめようも知らず、いっしょに涙をこぼしながらおろおろしていた。

「でも、おなかの子は、もう生きはじめてるんでしょ。生きたがってるかもしれないわ。かわいそうよ」

啓子のことばも耳に入らないように、虚空をみつめてまなじりを吊りあげている文子の膝をゆすって啓子がいった。

「ねえ、もう半月辛棒してみて、それからにして……それからでも、間に合うんでしょ」

半月の日をおいたばかりに、激情はなだめられ、その機をいっしてしまった。そして純二は兄の恵一よりまるまると肥えた元気な赤ん坊として生れた。

新宿で下車する人が多く、ふたりはようやく並んで坐った。

「変ったでしょうね、学校のまわりも」

啓子はいう。

「そうね。わたしだって何年に一度しか行かないから……でも変った筈よ、第一、中央線が高架になっているでしょ」

「え？ これ高架なの」

啓子がおのぼりさんらしい目付になって、腰をまわし、窓の外を見ようとする。

「昔の中央線って、新宿から先は、ある種の雰囲気があったものだけだねえ」

「そうね、でも変ったといえ、今日集る人たちもどんなかしら、三十年ぶりで逢う人がほとんどなんだから」

「そうよ。わたしなんか、特に、卒業といっしょに京都から四国へお嫁にいつてしまつて以来、全く音信不通もいいところでしょ。つきあつてるのは文子さんだけなんだから、覚えていてくれるかしら」

藤巻文子と岡田啓子が今日の東都女子大時代の旧友の集りの案内を受けたのは、一ヵ月ほど前のこと

だった。差出人は末尾ひろ子の名になっていた。文子も啓子も姓が変わっているが、ひろ子は女子大時代の姓だった。ひろ子が離婚したと聞いてからも、もう十数年以上がすぎている。

文面は簡単で、女子大時代のお列会をしようということである。「列」というのは東都女子大の寮だけで用いられる特殊な呼び方で、他の女子大の寮ならさしずめ組とでも名づけているグループの呼称であった。東都女子大には寮が二つあって、東西の寮にわかれていた。

文子と啓子が入学と同時に入ったのは東寮だった。そしてふたりは末尾ひろ子が列長としてひきいる列のお列子となった。お列子という呼び方で呼ばれた時、文子はがまんしきれず思わず吹きだし、啓子は笑ってはいけなことがまんして、大きな目に涙をいっばいためた。

末尾ひろ子はそんなふたりをやや吊り上った細い切れ長な目で見て、にこりともしないでいった。「笑っちゃうわよね。あたしだって、最初はびっくりしたもの、変てこりんな呼び方よ、でも馴れると、何でもなくなるわ」

それは入寮第一日目の、はじめてのお列会の席でのことだ。文子も啓子もそこではじめて、自分と同じ列のお列子にひきあわされた。新入生は三人で、もうひとりの小笠原由美は、二つ年上の姉の絵美が英文科にいたので、この呼び名には馴れていた。

寮は一人一部屋制度だった。ドアをあけるとすぐたたきがあり、その横が半間の押入れになっていて室内は三疊だった。窓ぎわの一疊が板の間で、作りつけの机と筆筒が向いあっている。残りの二疊にベッドをいれている寮生も多かった。

列長のひろ子の部屋はベッドがなく、二疊の畳に九人のお列子が押しあいへしあいであって座っていた。益子焼の紅茶茶碗でひろ子のいれる紅茶がリレー式にくばられ、コロンパンのクッキーや手焼せんべいが廻されてきた。先輩のお列子が、春休み故郷から持ってきた土産のお菓子が次々とその上に加えられて

いく。

新入寮生歓迎の意味もあるらしいそのお列会では、文子たち新お列子に、専ら話しかけられたが、新お列子は申しあわせたように堅くなったり、もじもじしたりして、壁に背中を押しつけていた。

列長のひろ子は知的で古典的なちよっと冷い印象を与える顔付に似合わず、気さくな口のききようで、誰彼に満遍なく話題をむけ、ホステスぶりが板についていた。国文科生らしく、矢絣の着物に青い袴を宝塚の生徒のように短めにつけた姿が華やかでさえあった。

昭和十八年の春、まだその女子大ではひろ子のような和服姿の学生が珍しくはなかった。

その夜の会で、文子がハルビンで育ったこと、家族はハルビンにいて、兄が東大生で本郷に下宿していること。啓子は京都の室町の呉服問屋の末娘で、両親に内緒で女子大の試験を受け、パスしてからも入学させるさせないで、ハンストをしてようやく両親、特に反対強硬だった父親もあきらめて許可がおりたこと。由美はピアノリストになりたくて音楽学校に入りたかったが、これは家族の反対にあつてあきらめて姉と同じコースで、女子大の英文科に入ったことなどがお互いにわかりあえた。

会が果てて廊下に出た時、啓子が文子について文子の部屋の前まできた。

「ちょっとだけ、入らしてもらえへん？」

「どうぞ」

文子も急にひとりになるのが淋しい気持で啓子を招い入れた。まだ荷物もといえない部屋は、がらんとして、わびしく、監獄の独房を連想させるように寒々としていた。ひろ子の部屋には本棚が入っていたり、折りたたみの朱塗りの茶ぶ台があったり、壁にローランサンの複製がかかっていたり、中国の影絵の人形がいくつもはりつけてあったりして、結構賑やかであたたかな雰囲気があった。それに何といっても若い娘が九人もつめこまれていたのだ。

それに比べて、この部屋の冷さはどうだろう。ふりかえると啓子が今にも泣きだしそうな顔になっていた。

「ここもやっぱり同じねえ、わたしのお部屋と」

「お列長さんのお部屋みたいに飾りつけましようよ。だんだん」

「そうね、ひとり部屋っていうのに、とても懂れていたの、そやからあんまり期待が大きすぎて」

啓子はそういつて丸い肩をちょっとすくませてちろっと舌をだした。それから急に甘い声になって、
「ねえ、仲ようしてね」

と小指をさしだし、文子の小指にからませてきた。その時の子供じみた指切りの誓約が、まさか三十五年後の今日までつづこうとは、文子も啓子も思いも及ばないことだった。

末尾ひろ子からの案内状を受取った翌晩、四国の啓子から電話で文子に問い合わせが来た。文子も卒業以来、ほとんど、毎年ある校友会やバザーやクラス会などに出席したためしがないことを知っていたからだった。

「行ってみようかと思ってたところ」

「ほんと？　じゃわたしも上京します。文子さんにも逢いたいし」

「じゃうちに泊って、梓の部屋があいてるから」

東京駅で荷物は純二に渡して、真直女子大へ行けば丁度指定の時間に間に合うという、文子のときばきした指示に、啓子は従順に従って、予定通り東京駅に到着したのだった。

西荻窪駅で下車すると啓子は、肥った肩をゆすって、

「まあ！　まあ！」

の連発だった。三十年目に下りたった駅は、彼女の記憶の中の、古い木の腰掛が壁にくっついていた

駅とは全く様相がちがっていた。駅の前の広場でも啓子はすくんだように立ちどまって動かない。

「まるで外国へ来たみたい。昔はほら、ここに吉祥寺行のバスがいっぱい並んでいて、乗り降りするのはほとんど女子大生で」

「そうね」

啓子の口調にひきこまれて、文子もあたりを見廻した。啓子とちがい東京住いの文子は、卒業以来ということはなく、何年に一度かこの駅にも降りているが、それでも東京の町の変り様のすさまじさは、どこへ行っても一ヶ月も通らないと、道をまちがえたかと思うくらい変貌を上げていることが多い。都心より、郊外に近いあたりの発展のいちじるしさは、魔法の杖で撫でたような変り様を見せるのだった。

タクシ一の乗り場をさがして駅の東側へ廻ると、啓子がまた悲鳴に近い声をあげた。

「踏切りがなくなってる」

文子もそういわれて、遠い昔の踏切りを思いだした。彼女たちがまだ東都女子大の学生で、寮にいた頃、よくこのあたりまで歩いてきて、踏切りをこえ、その向うのコーヒートケーキの美味しい店へ出かけるのが愉しみだった。ちょっとした日用の買物は、その商店街で大方ことがたりていた。踏切りが下り、電車が通過してしまうと、たいいてい線路の向うの人群れの中に、顔見知りの女子大生が何人か待っている。

駅から歩いて十五分の女子大のまわりは、まだ武蔵野の名残りがあって、女子大から善福寺までのあたりの田園や森や池のある風景は、夕陽や彩雲や光る風に飾られて、泰西名画のように見えることがあった。

春は構内の桜がトンネルをつくり、秋は校舎の裏にすすきの穂波が銀色の海をつくる。バスがゆった